記憶を紡ぐ建築

指導教員　　吉松秀樹教授　　印　　0BEB1125　中畑　真琴

1. まちから得る記憶

多くの建築物が更新時期を迎えている中、その表層を失うことは記憶や培ってきた土着性までも失われるように感じた。建築はその記憶を残しながら生まれ変わることを必要とされているのではないだろうか。

2. まちの中の記憶のストック

まちの中に残る記憶は、経験の濃淡によって深く土地に根付いたものとなる。その場に何度も通うことや、その場で起こった出来事、その場を居場所とするコミュニティなどがまちの記憶として残されてゆく (Fig. 1)。

母校　毎日利用した通学路の橋　1等賞になった運動会　お世話になった先生や友達

Fig. 1　母校からみる記憶

3. 記憶の引き継ぎ

更新されてゆくまちの中で、それまでの記憶を新たな建築に写すことを考える。その場に何かがあったことを感じさせることで、途切れることのない関係性を築く。それは人が席を立ったあとの微かな温もりを感じることであったり (Fig. 2)、誰もいない部屋に染み付いた煙草の匂いを感じることであったり、その場になくなったものを他の何かに据え付ける操作を行う。

Fig. 2「いる」から「いない」の間の痕跡

小泉雅生の住宅の増築「メガタ」において、建築は既存の余白によってヴォリュームを決定し、母屋や樹木が失われた後も痕跡が残される操作を行っている。この敷地のこれまでの履歴を引き継ぎ、記憶を紡ぐ建築である (Fig. 3)。

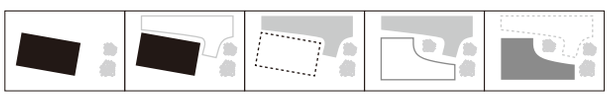

Fig. 3「リノベーション・スタディーズ」五十嵐太郎

4. 母校の遊具跡へ記憶を残す

東京都町田市立南成瀬小学校 (Fig. 4) にあった「月山（つきやま）」「星山（ほしやま）」という遊具の跡に、そこで遊んだ子ども達の記憶を残す新たなかたちの学童保育所を提案する (Fig. 5)。

遊具の痕跡、周辺の住宅や街区によってヴォリュームを決定し (Fig. 6)、2F の高さを遊具の高さと合せ、階段を遊具を登るように配置するこで遊具の上で見ていた風景を残した (Fig. 7)。

Fig. 4 配置図

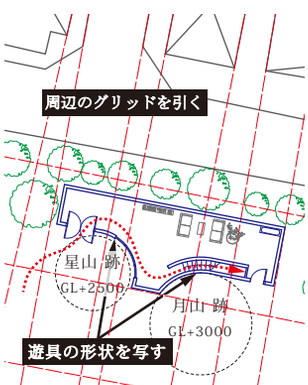

Fig. 6 1F 平面図

Fig. 5 模型写真

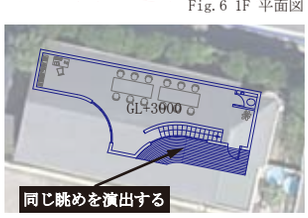

Fig. 7 2F 平面図